

講演録

シンポジウム

東京湾の再生と葛西三枚洲

かさいさんまいす

ラムサール条約への登録を目指して

2016年12月18日

日本野鳥の会 東京

法政大学資格課程



「葛西三枚洲の鳥類とラムサール条約」

日本野鳥の会東京 幹事 飯田 陳也

茨城県生まれ。江戸川区葛西に住み始めてから野鳥の観察を始め、葛西臨海公園・鳥類園オープンと同時に探鳥会を開催し、現在に至る。野鳥の生息環境を守ることと、自然に触れ、身近な環境に関心を持つ人を増やすことをめざして「葛西東渚・鳥類園友の会」を立ち上げたほか、東京都に対して、2020年東京オリンピック開催に伴う園内でのカヌー競技場建設の見直しを求める活動に奔走し、園隣接の都有地への計画変更を実現させた。日本野鳥の会会員、日本野鳥の会東京幹事、東渚・鳥類園友の会会長。



東京オリンピックのカヌー競技場問題

日本野鳥の会東京の飯田でございます。葛西に関わって30年になります。ここの魅力にどんどん惹かれて、皆さんご存じのように、4年前にここの公園の中にオリンピックのカヌー・スラローム競技場ができるという話を聞いた時から、私は東京都と交渉して11回の交渉の中で、私たちの要望を通すことができました。ただ、今でも時々「カヌー競技場がもめているじゃないか」と言われるので、ちょっと触れておきたいと思います。

カヌー競技場が臨海公園の西側3分の1くらいをコンクリートの川にしてしまう計画だったのです、こんなふうに森が非常に広くつぶれる予定でした。皆さんの署名などのご協力を得て、西側の端、ここは東京都の下水道局の敷地ですが、そこに追い出して、臨海公園の木は1本も伐採されずに守ることができた。これは皆さんのご支援のたまものだと思います。本当にありがとうございました。



2020年招致計画時のカヌー競技場イメージ
(招致委員会2020年立候補ファイルより)



Google earth を加工

オリンピックの開発から公園の環境を守って安心かという、公園の目の前の大きい駐車場に 5 階建て 600 台の立体駐車場ができるとか、西なぎさの中に大きな海水浴場ができるとか、開発計画は目白押しに出てくるのです。環境を守っていくためにはもっと積極的にラムサール条約などに登録して、末永くこの環境が守られるようにしていかなければいけないのではないかと、野鳥の会でも 1 年くらい前から下準備の打合せをしてきて、今年 6 月 19 日に、臨海公園のウォッチングセンターでシンポジウムを開催しました。そして、100 名の会場で 128 名、立ち見が出るくらいの参加者で成功させることができました。

現在の三枚洲

冬になると、冬の風物詩と言われる野鳥がたくさんやってくる場所なので、先ほど樋渡さんから歴史を中心にお話しいただきましたが、私は現在の三枚洲を映像でご紹介したいと思います。樋渡さんが先ほどお話をされていた、東京都建設局の葛西臨海公園を実現する埋め立て計画は、『今よみがえる葛西沖』という本で紹介されていますが、こんなふうに葛西の沖は遠浅の干潟が広くあって、家族で潮干狩りが楽しまれていた環境だったわけです。



東京都建設局発行「今よみがえる葛西沖」より

臨海公園は完全に海の中、私が住んでいる清新町は左側の上の方ですが、ここも海の中でした。ここを東京都が埋め立て、江戸川区が区画整理事業という形でまちがつくられました。埋め立てたところは、何度も水害が繰り返されたことから、大きな台風が来た時に住民の避難地域になるように、他よりも地盤が高く、しかもしっかりと瓦礫を埋めた公園が計画的につくられ、非常時には広域避難地域になるような設計にされています。そして臨海公園の沖は、広い場所が海上公園になっていて、野鳥がたくさん来ている場所です。白い線が今までの歴史、臨海公園部分は全部埋め立てられてつくられたものです。

この葛西臨海・海浜公園には様々な環境がつくられました。マグロが泳ぐことで有名な水族園があり、その左の、公園の3分の1の面積を占める範囲が鳥類園となっていて、池や林があります。西の海側には、松の防風林がつくられました。この場所にオリンピックのカヌー競技場がつくられると聞いて、私たちは生き物調査をしました。そして、この場所の自然の豊かさを、例えば80種類ものクモが観察されるなど、野鳥だけではなく、他の生き物にも焦点を合わせてアピールしました。臨海公園から橋を渡った先の西なぎさは、海の生き物に触れるところ、東側は立ち入り禁止にして野鳥の楽園になっています。つまりこの公園は、全体に生き物をテーマにした基本的な計画があってつくられたところなのです。現在、野鳥をはじめとする生きものが非常に多いのは、当時のそういう基本設計が今に活きているのだと思っています。

臨海公園の海の方、海浜公園ですが、公園の沖に広く分布している範囲が三枚洲です。東京湾の干潟の9割が埋められたなかで1割くらい残っている重要な干潟の1つであり、東京に面しているという点では葛西の三枚洲が唯一、一番大きな干潟でもあるわけです。この干潟に上陸した時の映像ですが、大変広いことがご理解いただけると思います。手前から沖の方まで大潮で、潮が引くとゴム長靴で歩いていけるのですが、2キロメートル程先まで遠浅の干潟になっており、生き物がすごく豊かです。ヤマトオサガニは目玉がマッチ棒のようにとがって出ていて、100平方メートルくらいのところに2000匹くらいのカニがいて、他の生き物を支えている生き物の1つです。



提供：葛西東渚・鳥類園友の会

スズガモとカンムリカイツブリ

野鳥はスズガモが一番多いです。10月末くらいにやってきて3月末に旅立つまで、約5ヶ月間を東京湾で過ごしています。これが3月末くらいの映像です。



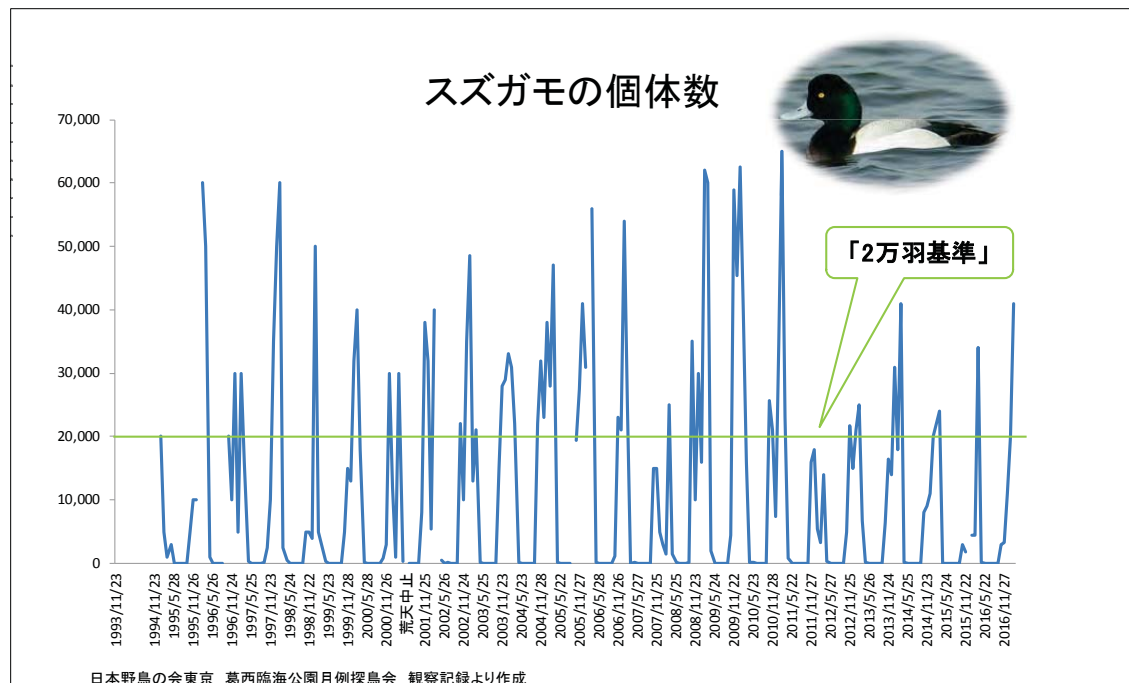
提供：葛西東渚・鳥類園友の会



撮影者：鈴木弘行氏

この写真で、2万羽くらい写っているのです。手前の方に大きいものは500メートルくらい離れていて、写っているぎりぎりのものが800メートルくらい離れています。人によっては慣れないと、この姿が1000羽くらいにしか見えないのですが、実は2万羽くらい写っているのです。最後に皆さんに動画でお見せしたいと思います。ここのスズガモは珍しくもないし、あまりに数が多すぎて写真家からは人気がないのです。けれども私はこの鳥に22年間こだわって調べてきました。毎月第4日曜日に観察会をやっているとして、このときに数えてきたスズガモの羽数をグラフにしてみました。緑のマークをつけたところがちょうど2万羽を超えているデータです。緑の線が2万羽の線ですが、それを毎年超えていることがご理

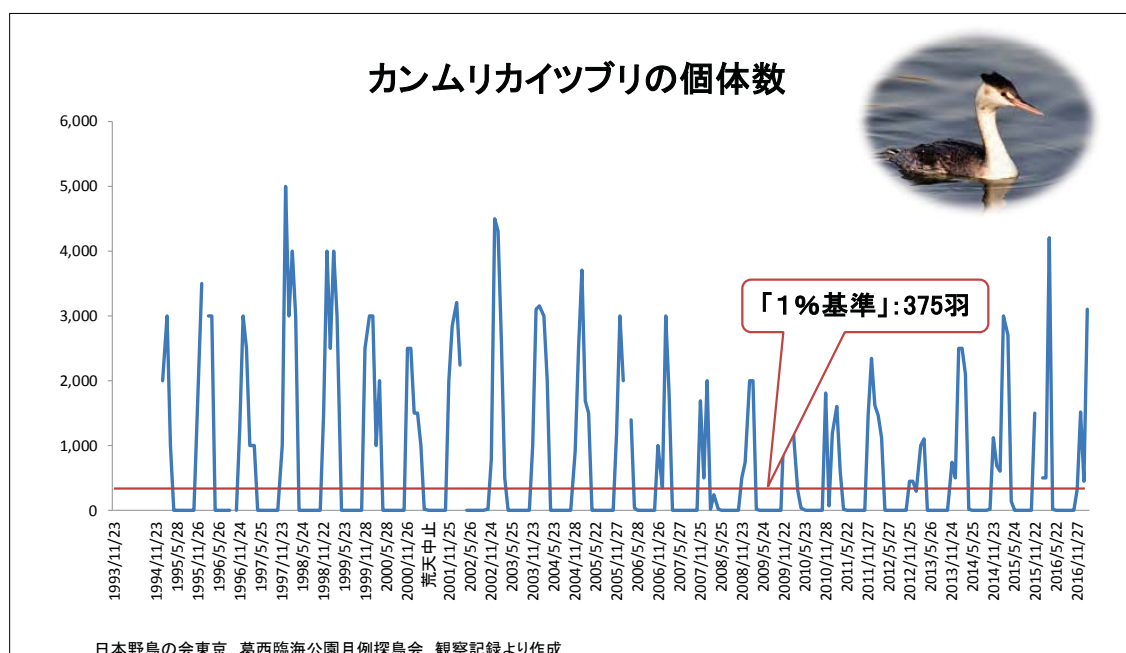
解いただけだと思います。臨海公園のラムサール条約湿地登録を考える場合、登録に必要な基準の 5 番目にある、「2 万羽以上の水鳥が生息している」という点では、スズガモがこれを満たしています。



今度は希少種の方で、カンムリカイツブリといいます。この写真は夏羽といって、日本ではなかなか見られない写真です。日本にやって来た時は、もっとつるんとした頭で全体が白っぽいのですが、繁殖地に帰りそびれて 4 月、5 月くらいまでいた時に友人が写しました。立派な冠がこの鳥の名前の由来です。ラムサール条約湿地の登録に必要な基準の 6 番目「推定生息数の 1%」にあたる緑の線よりはるかに多く、10 倍くらい来ている時もある、日本一の集結地点かもしれません。これは、いずれ明らかにしていきたいと思っています。



撮影：中島喜久夫氏



東京都の鳥獣保護区から国指定の鳥獣保護区に

ラムサール条約湿地の登録に向けて、現在の葛西の状況を考えた場合、今は東京都の鳥獣保護区になっていますが、これを国指定の鳥獣保護区に格上げすることが必要になります。それには環境省などの理解も得なければならないし、地元の江戸川区や東京都の腰を上げてもらわなければならない。そういうことがあります。

今現在の東なぎさですが、鳥獣保護区の網の他に、立ち入り禁止で環境を保全していることになっています。先ほどの樋渡さんの話にもありましたが、東京都の開発計画には荒川の右岸から左側が対象で、右側は保全地域になっている、今のところ大きな開発計画がない。これは私たちがラムサール条約登録を進める上で非常に重要なことだと思います。これからできるだけ本日のような会を頻繁に開いて、普及啓発でこの運動を大きな世論にしていける必要があると思っています。

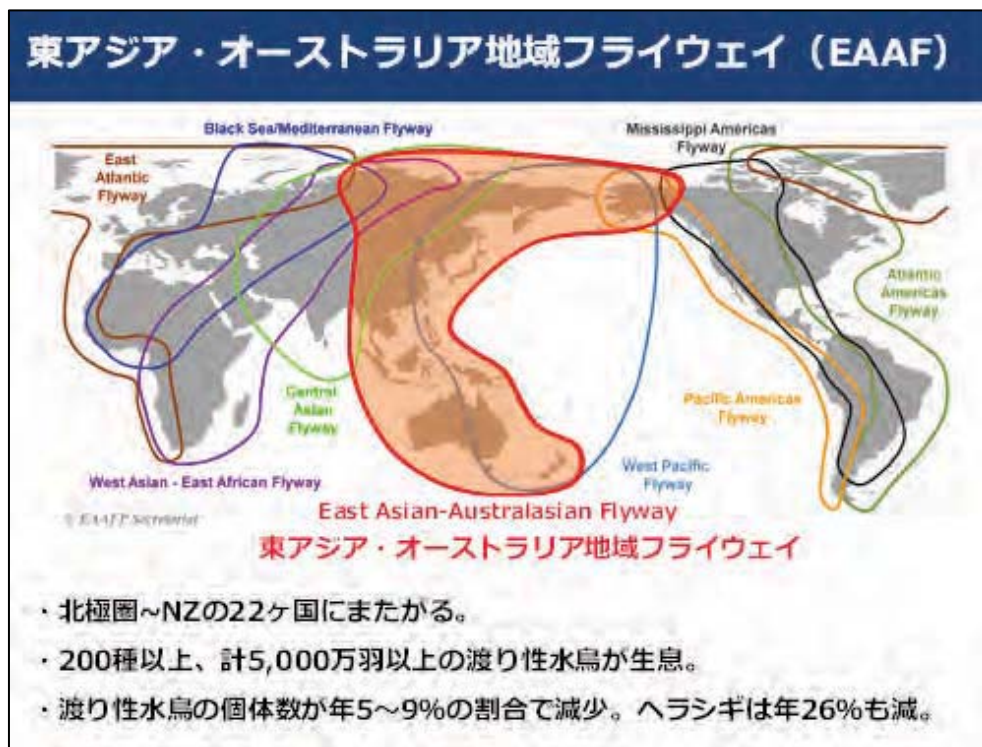


Google map より加工

昨年11月江戸川区から野鳥の会に相談があって、野鳥によって江戸川区の魅力を表現するという企画展示にかかわりました。今年1月16日から5月5日までと、イベントとしては大変長い期間でした。日本全国で見られる630種類の鳥のうちの260種類、40パーセントが江戸川区で見られます。区長さんから「この数字は日本一と言っているのか」という質問があり、「日本有数の」と言い直してもらいました。この企画展示会には、期間中に44,800人の入場者がありました。この展示は、江戸川区の人たちに自然への関心を広げるのに大変大きな役割を果たせたと思います。

東アジア・オーストラリア地域フライウェイ（EAAF）

ここは世界にある鳥の渡りのルートから見ても、「東アジア・オーストラリア地域フライウェイ（EAAF）」と言って、大変多くの鳥が利用しているところです。葛西、あるいは東京は、大変重要な中継地点になっています。そういう意味でも重要な中継地であることを理解していただければと思います。





この写真は西なぎさです。コアジサシという鳥は、オーストラリアから 6000 キロも旅をして子育てをします。しかし、こういう環境がどんどん少なくなっているために右肩下がりにどんどん減っています。こういう鳥たちが繁殖地として西なぎさを頼りにしていることを考えると、これからも守っていかなければいけないと思っています。



撮影：福山和夫氏

ヒナが食べているのは、親が捕まえてきた魚です。親がくわえているこの魚は、手前にしっぽ、向こう側に頭がありまして、ヒナと同じくらいの大きさがあります。私の身長で魚を考えてみた場合、カツオを越えてマグロくらいの大きさになると思います。コアジサシのヒナは、自分の身長くらいの魚を何本も食べてしまうのです。育つのもすごく早いです。このように、たくさんの野鳥が葛西三枚洲を訪れています。



撮影：大内康弘氏

この写真は、去年から今年にかけて人気になったミサゴという、魚を捕まえる猛禽です。捕まえたのはスズキだと思います。お立ち台といって、カメラマンに一番人気のある杭の上に魚を持ってくるのです。写真を撮ってもらうのを気にしながらポーズをとってくれたりします。羽を広げるとカメラマンはすごい勢いでシャッターを切ります。

登録後の管理について関係者間で十分議論し方向を出すことが大事

毎年6月と11月に、「東なぎさクリーン作戦」というゴミ拾いのイベントをやっています。この前は114名の方が参加してくれました。



2018年にドバイで行われるラムサール条約締結国会議、COP13で認定してもらう目標に、運動を進めていくつもりです。風呂田先生にも厳しく言われているのですが、ラムサール条約湿地に登録されることがゴールではなく、その後の管理をどうしていくかを、関連する人

たちで議論して、方向性を出していくことが非常に大事だと言われています。私自身、今日の皆さんの話は大変参考になりました。

次の動画で締めくくりたいと思います。実はまだ公開していない映像で、友人の田頭さんが3年かかり、やっと捉えられた映像です。わずかな時間ですが付き合ってください。ディズニーランドのホテル群の前に浮かぶスズガモの群れです。約98パーセントまではスズガモです。違う鳥が少し混じってしまっていて、これがカンムリカイツブリです。カンムリカイツブリをこの中から数えるのはすごく大変です。時々ハヤブサが一斉にスズガモを飛ばしてしまうのです。カンムリカイツブリは潜れるものだから全然怖くなくて、しっかり残っています。そうすると純粋のカンムリカイツブリの群れを数えられて、そういう時に3000とか4000と、自信がありますから3000羽いるんだとよく言うのですが、皆さん「どうやって数えるんだ」と信用してくれなかったりします。これが舞い上がりますので静かにご覧いただきます。3分で終わります。これがカンムリカイツブリです。後は全部スズガモです。ちなみにこの日も数を数えたのですが、約6万羽いました。これが着水すると終わりです。



撮影：鈴木弘行氏

風呂田先生や樋渡さんの計画された公園が、このように生き物を支えているのを見ていただきました。ご清聴ありがとうございました。